

註目 平田氏の阪田山の神様附近にて出會つた改り即ち藩州四番隊にて、川村海軍大將、川村元帥、黒木大將、兒玉少將などが梁田より小泉通過古戸に出しを證するものなり。

(大正一一、七、一〇)

官軍の人足として梁田迄銃を擔はせられた

山田忠太郎氏の談 (昌樂、大川、吉田)

我は當時二十一の血氣盛りで何んでも戦争のあつた前日即ち三月八日の夜十時頃(四ツ時と思つた)と覺しい時に『梁田に戦さがあるんだから人足に出ろ』といふ知らせでした。

著者曰 三月八日の夜十時頃この通知があつたとすれば、熊谷本陣方に於ける討伐の議は早く決して居つたに相違ない、梁田に戦争があるなどといふ事は絶対にいはれぬ筈なり、況してこの官軍は木田を攻撃する目的なりしに見ても戦時の機密なと下級のもの況して、民間になど知れる理由なし、右は疑はしき點あるも茲には同氏の言草まゝを記し置く事とせり。

其の當時の助郷といふのは古戸分は、仙石、古海、吉田、阪田、古氷、寄木戸、古戸の七ヶ村で、問屋は原田権兵衛といふ家でした、この人足の通知を受けるとすぐ、飯を炊いて腹ごしらへをして辨當を持つて問屋へ友人と一つしよに詰めましたが、まだ〜眞暗で一吋先きもわからないといふ様な有様でした、なんでも問屋へ詰めたのが彼れこれ朝の二時頃になつて居つたと思ひますが、そこでの話しではもう先口は通つたといひました。

著者曰 この先口といふが池上四郎の率ゆる二百餘名のもと大垣の有する大砲一門との隊なり

暫くすると人足のものも集つて来る大分問屋場前は賑ぎやかになつて來ましたが、土堤の方へ行つてゐた連中が官軍が向ふ岸へ見えるといふ話があつたので我れ先きにと土堤へ上つて見ましたが水煙が立つてゐてはつきりは見えなかつたが『ブランケン』を着たものや、陣羽織を着たものなどが見えましたが我どもは、人足宰領の命令で土堤の上へ勢揃をして舟から上つて來るのを待つてゐましたが間もなく上つて來ました、この時の舟は七八隻でしたがこれがこの河岸のあるぎりの舟でした、上るとすぐ鐵砲や荷物を皆手分して持たせられた、一寸上役と見える方は皆陣羽織を着てゐました、が大いては筒つぼだんぶくろでした。

荷物としては、合羽籠が十二三に、彈藥箱二十位はあつたやうに覺えてゐます。

註目 合羽籠、往時貴族の外出の時に從者の雨装とする合羽、笠などを納れて奴隷に擔へ行かむる具、兩箇の籠に蓋あり棒

内容見本

(原寸大)

梁田戰蹟圖

慶應四年三月九日

明治 梁田戰蹟史

明治維新史における轉換点とも言える
たつた一日の戦いを、官・幕軍の家族から
現地住民の目撃談・体験談に至るまで
徹底的に掘り起こした希有の戊辰戦史！

限定二百部復刻

真下菊五郎 [著]

マツノ書店

幕軍(衝鋒隊)正副将

總督 古澤佐合角(名譽)

副總督 今井信邦(名譽)

参謀 内田正司(名譽)

副隊長 永井健吉(名譽)

副隊長 柳田正樹(名譽)

副隊長 柳田正樹(名譽)

副隊長 柳田正樹(名譽)

副隊長 柳田正樹(名譽)

第二編 幕 軍

第一章 戦記

- 一、衝鋒隊戦争略記
二、衝鋒隊戦史
三、幕軍隊長内田庄司陣中雜記の一節
四、第二隊長天野新太郎手當受取高覺

第二章 梁田にて直接戦闘者の談

- 一、幕府の倒潰せんとするに際し奮起するものなきに憤慨し僅か十五歳にして父に従ひ梁田では抜刀して兵員を激励した、内田萬次郎氏の談
二、年齒僅か十五にして兄に従ひ梁田より函館に至る迄よく奮闘した、今井省三氏寄書
三、幕軍に従ひ梁田に奮戦したる、琴谷利助氏寄書
四、幕軍に投じて梁田に従軍した柔道家、廣川源七郎氏の談

第三章 三隊長の履歴及縁故者の談

- 一、古屋君追遠碑文
二、幕軍古屋總督の一生
三、幕軍古屋總督の逸事
四、古屋佐久左衛門日記抄
五、内田莊次略傳
六、今井信郎の逸事
七、今井信郎の生涯
八、私の知れる父の一生

第四章 傳記

- 一、幕將 古屋左久左衛門の傳
二、隠れた今井信郎翁

第四編 戦争関係者の談

第一章 熊谷―梁田

- 一、本隊及増援隊進路
熊谷―妻沼―太田―八木―梁田
熊谷に於ける總督一行の宿營及梁田の戦争に就きて
林有章氏寄書
妻沼の名主小林勝藏が官軍を梁田迄案内した名主の伴小林伊三郎氏の談
妻沼河岸の番小屋に三日三番寢起して官軍様を漕ぎ渡した 内田莊藏氏の談
三度官軍の足に使はれた 鈴木次郎衛氏の談

- 古戸河岸の官軍を終日漕ぎ渡した夕方には分捕品の番を頼まれたのを幸ひ彈藥を盗んで煙火を拵へた
○官軍の古戸河岸上陸を目撃した 新島馬次郎氏の談

- 戦争當時太田間屋場に勤めて居て萬事を知れる 江原善平氏の談
○梁田の左手といふ家の彈痕六十四五迄数へた鈴木仲次郎氏の談

- 臺之郷東で後詰に出遇つて、當時太田間屋場前は分捕品の山 若林由五郎氏の談
○現代の高山彦九郎を以て目せらるゝ勤王慷慨家 本島柳翁氏

- 梁田戦争の緒戦を見長藩組式金八郎の兩野征討に人足として沼田迄従軍した 戸塚源三郎氏の談
○官軍の彈藥箱を擔つて梁田迄、負傷者を駕籠で妻沼迄、元治年間より農兵の教育を受けた老兵 細堀熊太郎氏の談

- 梁田へ行く後詰の官軍を見た、組式の兩野征討の時は廿一歳、水戸浪人武田耕雲齋の時は十五歳で人足に出た 八代孫次郎氏の談
○金八店で火を炊いて休んだ駕籠を擔いで太田迄吉岡仙重郎氏の談

- 官軍の後詰に出遇ふた 高田岩藏氏の談
○幕軍の人足として馬を曳いて戦争の渦中を逃げて幸くも一命をとり止めた、水戸浪士にも人足に使はれた 木村房吉氏の談

- 二、増援隊及凱旋部隊の進路
古戸―小泉―石打―梁田
○官軍の悪口を言つて四五町も追はれたが命は取り止めた、翌日官軍に出遇へば遠く山の中で土下座を組んで拜んだ 平田文次郎氏の談

- 官軍の人足として梁田迄銃を擔はせられた 山片桐忠盈氏の談
○主人は父が見初めたので私ではありません館林の武具方 山崎すが氏談

- 幕軍の通過するのを館林西方三叉路で見居た 大槻喜平氏の談
○幕軍の通過を初めから見た、館林藩から高根に一小隊詰めた事を知つてゐる 櫻淵十郎氏の談

- 歩兵の久野村通過に關する 久野村長龜岡毎次郎及寺岡氏談
一、梁田の歴史

- 二、梁田居住者の見たる戦況
梁田戦争の實況
○自分の家には歩兵に泊まられ戦争の渦中宿の中を逃げ廻つて九死に一生を得た 齋藤信吉氏の談

- 歩兵と一しよに太田迄行かうとしたら戦争となつて引返へした 津久井與三郎氏の談
○歩兵の人足として梁田長福寺にて大砲の掛りを命ぜられ、二度人足に引出されて其の晩は不寝番として戰場を巡回して度々戦死者に躓いた 沖山藤太郎氏の談

- 三、西方より見たる戦況
○官軍に尾行して戦争の終始を目撃した 石橋重次郎氏の談
○戦争の短縮を目撃した 高澤新吉氏の談

- 四、南方より見たる戦況
○梁田の南から戦争の實況を目撃した 長柄村長新井佐五郎氏の談
○川崎の渡船場監督をし人足世話した 當時の名主丸山源右衛門氏の談

- 梁田東南茂木村附近幕軍敗走情況及戦死者の後始末をよく知れる 長島重藏氏の談
○次男彌八の生れ相になつてゐたのを戦争の鎮まらざる迄待つて一里餘の避難地から馬で連れ戻つて分媿させた 鹽谷浪五郎氏の談
○幕軍大將林の首の受取を有する 鹽谷角造氏の談

- 人は情がなくなつてばならぬと退却して來る幕軍を急ぎ漕ぎ渡した 小笠原勝造氏の談
○此の村へも遊女が逃げて來た 飯島榮次郎氏の談
○戦争見物の處人足に捉まつて歩兵の負傷者を運び微發された代馬の跡を追つて奥州白河在まで泣き通し、負傷者三十餘名の首を吻れた悲惨な情況を目撃した 島田三郎氏の談

第五編 附 録

第一章 俗 語

- 其の一、維新前狂歌
其の二、戊辰當時の流行歌
イ、一ツトヤ一節
ロ、トコトヤ一節

- 其の三、戦争關係地の俗語
其の四、和 讀

第二章 書 信

第三章 梨羽海軍中將閣下梁田戦蹟

- 一、巡遊の動機
二、出發、熊谷報恩寺伊藤十郎展墓
三、利根河畔の史蹟
四、戦勝の第一原因 地太田の史蹟
五、並川、矢場川に當時の古老を謁す
六、感慨無量の梨羽將軍歎々戦死塚前に傾づく
七、羽生陣屋趾に當時の古老を引見す
八、忍町舊城趾巡覽、追憶惜く能はず缺々語るを欲せず

- 附各地歡迎員氏名



地元の声で記す幕末維新の側面史

西澤 朱実 (幕末史研究家)

「一に衝鋒、二に桑名、三に佐川の何とやら」——戊辰戦争の折、北越戦線でその武勇を謳われた衝鋒隊。彼らを越後へ至らせ、こののちさらに箱館へと向かわせる決定的な要因こそ、大敗を喫した下野梁田宿(現・栃木県足利市)での初戦だった。『明治戊辰梁田戦蹟史』が主題とする、僅か一日の戦闘がそれである。

鳥羽・伏見の敗戦後、幕臣Ⅱ古屋佐久左衛門・今井信郎は、東進する官軍に対抗すべく上州・野州から信越・奥羽に及ぶ親幕的連衡を構想し、代官Ⅱ松本直一郎と謀り、二月二日には松本が管理する信州中之条陣屋より支配地へ前年未納年貢の徴発を回達させ、軍資金確保に動く。さらに古屋は、会津へ向け脱走した旧幕歩兵第十一・十二聯隊を説諭して配下に収め(衝鋒隊)、正式に信州鎮撫の命を受けて慶応四年三月八日、総勢八五〇を率い羽生陣屋を出立した。一方、同月十五日に江戸総攻撃を控えた官軍では、東山道先鋒総督Ⅱ岩倉具定が同じく三月八日高崎に到着。その斥候隊として熊谷に入った川村純義・梨羽時起ら薩・長・大垣・山吹の兵約二百は、羽生屯集の旧幕兵に官軍横撃の意図ありと見なし、九日未明、梁田に宿陣中の衝鋒隊を急襲した。渡良瀬川を背に三方を囲まれた衝鋒隊は、一割近い戦死者を出した上、大砲六門を含む武器弾薬の多くを失い、以後、会津Ⅱ北越Ⅱ箱館へと転戦することとなる。

が、岩倉具定が「初戦二両道トモ得勝、先々愉快二候事二候」(「東山道督府書類・八」)と記したこの戦いは、のちの上野戦争や奥羽・箱館征討に比べ、規模において遙かに劣るため、「逆も不可戦争」(同前)の寡勢で金星を挙げた官軍の当事者達でさえ「ほんの小競合位」(見玉利国談)と顧みず、梁田戦は長い年月の間に風化した観があった。

これを嘆いたのが本書の著者Ⅱ真下菊五郎である。官幕両軍の将官はもとより、その家族にも取材し、直接聞き取りを行ったほか、本書刊行までの四年間に三百通もの書状を関係各方面に往復させ、梁田戦の徹底的な掘り起こしを図った。殊に圧巻なのは、八十余名にのぼる地元の人々の肉声——梁田戦の目撃・体験談の採集だろう。その中には、平田国学者だった若き日の田中正造が官軍の宿陣に際し奔走したこと、官兵との間に言葉が通じず筆談でようやく相手の氏名を確認したこと、町の天ぷら屋がサツマイモの天ぷらを売っていて薩兵に怒られたことなど、地元ならではの逸話が含まれている。

その蒐索を可能にしたのは、著者の真下自身が「地元民」だったことに負うところが大きい。幼い頃から梁田戦の話を知っていたという真下は、本書刊行時の居所Ⅱ群馬県邑楽郡小泉町(現・同郡大泉町)の近辺で生まれ育ったと考えられるが、そこは梁田を目指す官軍が颯のように往き、戦い終えて負傷者や大量の分捕品とともに凱旋した道にほかならない。

むろん集められた逸話には、たとえば座光寺盈太郎の戦死といった、オーラル・ヒストリー特有の誤認・誤伝も少なからず認められるのだが、著者の真下は必要に応じて註を付しながら、聞き取ったままを記すことで当時の空気そのものに迫ろうとする。その結果として浮かび上がるのは、「維新」ないし「戊辰戦争」といったものの非日常性であり、唐突に降って湧いた「戦争」という災難でさえイベントとして見物する、庶民のしなやかな強さだろう。官軍にも旧幕軍にも属さない「その土地の生活者」の目は、一種非情なまでの冷静さで戦闘を見つめ、他方、両軍の戦死者をひっそりとしかし手厚く弔う憐情を灯す。そして、あたりまえの生活を戦によって掻き乱された人々は、両軍の通過・撤退とともに、再び以前と変わらぬ毎日に戻っていくのである。

維新の流れにせよ個々の戦闘にせよ、今日それを見る場合、往々にして官軍vs旧幕軍(あるいは諸藩)のような直接的に相對する一八〇度の関係で捉えがちだが、ここに「第三の当事者」たる地元民の視線が入ることで世界は一気に三六〇度に拓けることを、本書は端的に示していると言って良い。また「官兵ノ功績モ将タ亦当時ノ役人トシ人足トシテ数昼夜二巨ツテ力闘セル古老ノ労苦モ、主家再興ノ芳情ニ健闘以テ芒間梁田ノ露ト化シタル幕軍戦士ノ遺勲モ」煙滅させるに忍びないと嘆ずる真下の一念、直接の関係者への丹念な取材とフィールドワークに基づく証言の収集、そして天狗騒動・出流山拳兵に遡って筆起される地域の記録は、今日の郷土史・地方史に通じる視点と手法であり、在野の史家の真骨頂がここにある。

惜しむらくは、マクロ目線のフィールドワークに重きを置いた分、梁田戦の戦闘経緯を含め、俯瞰的な総論が十分に提示しきれない感が否めないが、これについては、巻末と本文中に挿入された詳細な戦闘図の活用や、大山柏『戊辰役戦史』等を併読することによって補うことが可能だろう。本書の六百ページには、まさに慶応四年三月九日という利那の重さが凝縮されているのである。

余談ながら、梁田戦が出来た三月九日は、山岡鉄舟のいわゆる「駿府駆け」の真最中でもあった。この折もたらされた西郷の書翰により、十四日の勝・西郷会談から江戸総攻撃中止、無血開城への道が開かれたことは周知のとおりである。そうした状況の中で梁田戦を見た場合、小競合いとされ歴史に埋もれがちな単発の事象ながら、対処を誤れば東征のプロセスや江戸無血開城のシナリオに影響を与えかねない転換点のひとつであったことも、本書によって再認識される必要があるだろう。

本書に記録された当時の目撃談・体験談は、今日いかに手を尽くしても千金を積んでも、絶対に得ることの叶わない貴重な歴史の宝である。一方で、古書市場では本書の在庫が散見されるものの、六〇七万円と、一歴史ファンの手に負えるものではない。今回マツノ書店からの復刻により、先人の遺したこの宝がより多くの愛好家・史家の許に届き、さらなる研究に活用されることを心から願う次第である。

隠れたる名著

『明治戊辰梁田戦蹟史』



國學院大學法科大学院在籍 戦史研究者

長南政義

戊辰戦争における東日本最初の戦いである梁田戦争は、戊辰戦争全体からみた場合、瑣々たる局地戦ではあるが、戊辰戦史を語る上で重要な戦闘である。

慶応四年三月一日、旧歩兵差図役頭取・古屋作左衛門が、上州・信州筋鎮撫の命を受けて、江戸を立出した。江戸開城を控えて、暴発の気配を示す幕府歩兵を厄介払いしたい陸軍総奉行・勝海舟と、強硬派である古屋との思惑が一致した結果であった。

三月九日早朝、脱走歩兵屯集の報を聞きつけた、官軍である東山道軍の一部（薩摩藩四番隊、大垣藩、長州藩からなる約二百名）が上流垂方面から進軍し、辰の上刻（午前七時頃）、攻撃を開始した。戊辰戦争における東日本最初の戦い梁田戦争の幕開けである。官軍の攻撃は、濃い朝霧を利用した奇襲で、梁田宿を三方から包囲する作戦であった。

一方の古屋作左衛門率いる幕府軍約九百名は、三月八日午後、羽生陣屋を出発し梁田に宿営し、翌九日の早朝に出発する予定で、朝食を準備している最中に、官軍の攻撃を受けることとなった。完全に不意を衝かれた幕府軍であったが、勇猛果敢に防戦に努めたものの、敗勢を覆すことは難しく、百名を超える犠牲者を出し、渡良瀬川を越えて敗走した。

この梁田戦争の実態を、『防長回天史』、『衝鋒隊戦史』、『古屋作左衛門日記』、『内田莊次陣中日記』といった史書・記録類や、土地の古老による談話、維新の功臣の実話に徴して解明したのが、本書『明治戊辰梁田戦蹟史』である。

本書は、全五編と附録からなり、第一編

では、徳川幕府の滅亡から梁田戦争に至るまでの経過を讀者に示し、第二編では官軍に関する事を、第三編では幕軍の事を叙し、第四編では各地の古老の証言を集録し、第五編では俗謡や書簡を採録している。

著者の真下菊五郎は、梁田戦争の舞台となった梁田に近い群馬県の出身であり、自身が聞き及んでいた梁田戦争に関する史蹟・記録が、時間の経過と共に煙滅することを憂えると共に、梁田戦争に従事した先人の遺跡を表彰し、古屋作左衛門に象徴される武士的精神を涵養することを目的に本書を執筆した。

史書としての本書の価値を高めているのは、著者の編纂方法にある。本書は、真下が採取した古老や従軍関係者の生の談話を何等の修飾を加えることなくそのまま収録しており、その談話の内容も、上は古屋作左衛門といった司令官クラスに関するものから、直接戦闘に参加した兵士の談話、官軍を梁田まで案内した地元の名士の息子による梁田戦争実見談まで多岐にわたっている。

特に、古屋作左衛門の長男が語る「幕軍古屋総督の一生」や、京都見廻組の一員で坂本龍馬暗殺に関与したとされる今井信郎の長男が寄稿した「今井信郎の生涯」は、本書でしか読むことのできない貴重な歴史の証言といえるであろうし、今井の弟で自身も十五歳で従軍した今井省三が語った「今井信郎の逸事」には、今井が坂本龍馬と中岡慎太郎を殺害したことに関する記述も含まれており興味深い。

もちろん、戦争当時から相当期間が経過した後の証言だけに、記憶違いや、事実の正鵠を期し難いような証言中には存在するであろうが、著者の真下は、諸史料と照合して判明する範囲で註記を付して読者の閲読の便に供している。

本書編纂に際し、真下は往復四百通もの書簡を往復させたと述べているが、その中から、後世史料として保存の必要があるも

のを巻末に掲載している点も評価に値する。そうした書簡の中には、梁田戦争に参加した、後の元帥陸軍大将黒木為楨の絶筆なども含まれており、これも本書でのみしか読むことのできない価値ある史料となっている。

ところで、梁田戦争には、維新後に日清戦争や日露戦争の将軍・提督として活躍した者が多数従軍している。日清戦争の海軍軍令部長・樺山資紀、海軍卿として明治海軍整備に功のあった川村純義、日露戦争の第一軍司令官黒木為楨などがその例である。特に、日露戦争の鴨緑江軍司令官川村景明や、日露戦争の第一戦隊司令官梨羽時起が、本書編纂に協力したことは、史書としての本書の信憑性を高めることに寄与しているといえよう。

史書として優れた史料価値を有する『明治戊辰梁田戦蹟史』であるが、これまでその知名度が低かったのは、国内の大学図書館で本書を所蔵するはずが6校程度であり、利用に不便であったことに起因するものと思われる。

今回の復刻を機に、戦争経験者の「一生の声」を多数収録した本書を利用した戊辰戦争研究が進展することを願ってやまない。

▼内容を的確にお知らせしたいばかりに、活字だらけのパンフになってしまいました。しかし本書には、それほど鮮明ではないものの、当時の出版物としては珍しく75枚もの写真が入っています。

- 体裁 上製箱入 A5判七百頁
- 定価 一万六千円（税込・円別）
- 予約特価 一万三千元（税・円込）
- 予約締切 平成21年11月30日
- 発売 平成22年1月中旬
- ▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

限定二百部復刻（番号入）

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。

〒745-0032
周南市銀座2-13
☎0833-2295

マツノ書店

URL <http://www.matuno.com>
E-mail info@matuno.com